

平成 29 年度 第 1 回磐田市総合教育会議 会議録

日 時 平成 29 年 9 月 28 日 (木) 午後 4 時 00 分 ~ 午後 5 時 00 分

会 場 磐田市役所 西庁舎 3 階 特別会議室

出席者 市長、教育長、杉本憲司委員、青島美子委員、秋元富敏委員、鈴木好美委員
(出席者 6 名)

事務局 企画部長、教育部長、秘書政策課長、教育総務課長
秘書政策課政策・行革推進グループ長、担当
教育総務課総務グループ長、担当

傍聴者 0 名

[会議次第]

1 開 会

2 市長あいさつ

3 協議事項

(1) 親業(おやわざ)と子どもの貧困について

(2) その他

4 閉 会

[協議の主な内容]

(1) 親業（おやわざ）と子どもの貧困について

市長

本日のテーマは「子どもの貧困」となっている。委員の皆さんから何かヒントがありましたら、日頃感じていること、学校現場、地域の観点からご意見をお願いしたいと思う。

委員

スポーツ少年団でのことだが、お茶碗やお箸が正しく持てない、正座ができない、ご飯をこぼしても片付けられない子が目に付く。また「お話し中すみません」「お待たせしました」といった言葉も出てくる子が少ない。

昔は家の中でそういったことができていたと思うが、今は家庭力が弱いのか、そういったことができない子が増えている。「家が恵まれすぎているのではないか?」「親がやりすぎているのではないか?」と思ってしまう。

食事の支度や掃除等、やれることは自分でできるような子どもになってほしい。

委員

子どもの貧困は2種類あると思う。1つはいくら親が働いても貧困から抜けられないもの、もう1つは働いてもお金を自分のために使ってしまうような貧困。今の時代、職種さえ選ばなければ、働くところはあると思う。真剣に生活しない親が増えているのではないかと感じる。行政がそこに手厚く補助をしても、そういった親はお金を遊興に使うのではないかと思う。

例えば、小中学生を集めた寮のような施設を作り、そこで規則正しい生活をさせ「真剣に生きる・世の中のために生きる」といった教育をして、きちんと生活ができるようになるまでをサポートするほうが無駄がないように思う。今、家庭でのしつけ力、家庭の教育力は弱くなっているため、お金を親に渡すのではなく、そういったところにお金を使うべきだと思う。

「衣食足りて礼節を知る」きちんとした生活をさせて礼儀を教える施設で子どもが育てられたら、これは磐田市の徳になると思う。

委員

このテーマは、ここ数年自分が感心を持っていたことだった。

今年2月のテレビ番組で特集されていた「見えない貧困」で驚いたことがあった。現代は6人に1人が貧困であり、その貧困とは物質的貧困だけでなく、教育（経験）の欠如、繋がり（関係）の欠如とあった。自尊心や頑張れば報われるといった感情が失われつつあることを感じた。またそれ以外に、9月には「食糧支援の問題」も取り上げられていた。

こういったことからやはり今、家庭の力が問われていると感じた。

委員

貧困については難しいと感じる。本当になかなかお金がなく働くこともできない家庭もあれば、一方で、親の怠惰でという貧困が最近多く見られる。

医療費無料は助かっている部分もあるが、病院へ行くほどでもなくとも「医

療費が無料だから行こう」みたいな風潮がでてきてしまうのは少し違うと思う。

保育園のお弁当持ちで、菓子パンとバナナしか持たせない親がいる。親になったらある程度のことは我慢しないといけないが、それによって子育てをする喜びとか、子どもの成長を喜ぶ楽しみもあることを親に教えていかなければならないのだと思った。少しのことを犠牲にしても、自分の時間が削られたとしても、子育てとは尊いものなんだ、子育てに時間を注ぐことは大切なのだということを教える機会を、小中学校時代に設けるのは必要なことではないかと思う。

また、貧困のラインがどこなのかが不明確。塾に行けないこと、習い事に一つも行けないことが貧困なのか？そのあたりが難しいと思う。

それから、人との距離感がわからなくなっている親も多くなっている。初めて会った人との言葉使いがわからない親が多いと感じる。

事務局

磐田市の貧困の実態、状況について。今年度の就学援助制度の状況は、小中学生併せて 844 人、全体の 6.2%の子どもが就学援助を受けている。事務をする中で感じるのは、本当に生活が苦しい家庭が多いと思われる。

市としては限られた財源のなかで、年間 10 万円程度の支給をしている。この制度をしっかりと利用できるように周知していかなければならないと思う。

市長

みんなが優しく支える気持ちは大切にしなければならない。一方でそれを額面通り受けとる方ばかりではない現実があるということ。そうしたなかで、本当に就学援助を必要としている家庭を見極めていく必要があると思っている。

委員

小中学生を集めた寮の具体的なイメージとしては、親力のない親が子どもを育てるのではなく、そういった子どもを一時的に預かって育てる寮のようなもの。援助や手当は親に渡すのではなく、子どもに渡したほうがよいのではないかと思う。そうすると寮のような施設を作ってしまう、そこで子どもを預かってしっかりと育てる、きちんとした教育をつけるほうが良いと思う。

市長

川根本町には、全国から高校生を募って寮で生活させ、身の回りのことは全部自分でさせるとい学校がある。ここの学生にはすごい変化が見られるという。高校進学の一つの選択肢として、自立心を養うことのできる高校を選ぶという親が増えてきているようだ。

法制度等が整うならば、磐田版のそういった寮を作ることもできるのではないか。

委員

親としてのなすべき親業（おやわざ）をしっかりとっていくことは人が人間として育っていくなかで必要なこと。これからは、さらに地域力を上げ、

地域・親・学校が連携を取り合っていく事が大切。最近、世代間の繋がりが希薄になって来ているように思う。重層化して世代間を繋げて行くためにも、コミュニティー造りの原点となる「教育大綱」を、各種施策の中に取り込み「地域の文化」をベースアップして行く事が求められていると考える。

教育長

貧しくても自信を持って生きなくてはいけない。「お金があれば自信がある」というのは絶対違うということ子どもにも大人にも知らせたい。

貧しくても計画性を持てる環境を我々が提供することが大切。契機となる計画性の誘因をつくること。いろいろな援助をすることだけが、その家庭の助けにはならないが、その心を感じてもらい契機を作ることが必要だと思う。

親としての役割を果たさない親に対して関わりで親業を教える。子どもを預かって教えることで親に親業を見せることができる。関わりを預って育てることは大切だと思う。

市長

援助は、同じことをしても親によっては感謝する方もいれば、それを自分のために使ってしまう方もいる。そうなるとばら撒き感が出てしまうことも確かである。子どもに選択権はないので、せめて磐田だったら親に全てを支配されないような支え方や逃げ口は作ってあげたいと思う。

教育長

「今の親はダメだ」というが、どんな親でも子どものことは愛しているし、いい子に育ててほしいと思っている。でもうまくいかない。そんな環境を作ってしまったのは我々の責任でもあり、学校もそういった環境を誘因してきてしまったのではないかと感じている。このどうしようもなくなってしまった状況を一旦預かって、親に対して余裕を与えることも必要だと思う。

また医療費の無料化や就学援助は意味があると私は感じている。援助を受けている家庭と話しをすることにより、援助費の方向性を確認し合いながら決めることができるし、貧困の一番の敵は計画性のなさであるから、その計画性を教えることもできる。

市長

(仮称) 子ども図書館の整備を計画しているが、子育て支援センターでも、図書館でもない施設を考えている。相談機能を持たせ、広く浅く情報発信し、どんなことでも遠慮なく相談できる全年齢が集まれるような場所としたいと考えている。

教育長

貧困の一つの重要な要素は人との繋がり、人との距離感である。繋がりを作ることはソーシャルキャピタル(社会関係資本)となる。今までお金をかけてやっていたことでも、人との繋がりがあることによってうまくいく。

今、地域づくり協議会や学校運営委員の雰囲気がとても良くなっている。地域に親の姿を示すことができる人がいるということがこういった協議会で重要な要素となっていると思う。

市長

これからは、地域の自立とお金の使い方を地域の中で考えるようにしていきたい。それがこれからの時代を長く生きる人たちに全力を傾けるというイザムとなってほしい。